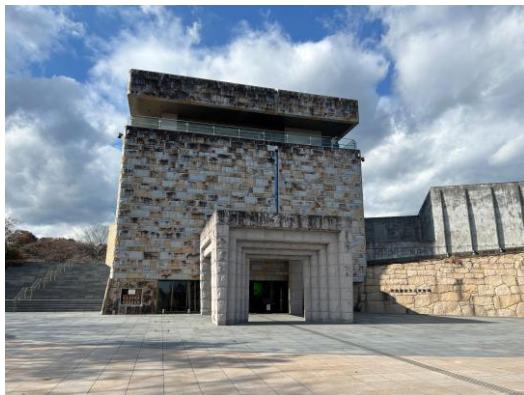


■西都原考古博物館コラム No.80

孤独の支度～古人骨編～

この春、人事異動で西都原考古博物館に戻ってきた。ここは以前、様々な面で自分を成長させてくれた職場でもある。また、ここで仕事をするのかと思うと感慨深い。



古墳をイメージした博物館の外観や吸い込まれそうな導入スロープ、展示室の雰囲気、そして館内のいたるところに散りばめられたメッセージが来館者の歴史探究心を誘い、さらに展示室の奥へ奥へと誘うだろう。それは学芸員である我々も同じ。常新展や企画展を鑑賞しながら、「以前よりも良い展示をしよう。」気持ちにも力が入る。

当館では、学芸普及担当職員それぞれが、各収蔵資料の管理を担っている。今回、自分の担当は古人骨だ。これまで土器・石器・鐵器は扱ってきたが、古人骨は初めてだ。

地下で2階建てになっている収蔵庫には、縄文時代から江戸時代にかけての古人骨が約800体収蔵されており、そのほとんどが古墳時代の人骨である。膨大な量だ。収蔵棚には、遺跡ごと、そして残存する部位ごとに古人骨が整然と管理されている。

見渡す限り、骨、ホネ、ほね…。



毎日の開・閉館時だけでなく、収蔵資料の管理や展示準備の際は、とにかく収蔵庫に出入りする。そうした毎日を過ごしていると、ふと、彼ら古人骨と目が合う気がする。だから、最大限の敬意を込めて、心の中で「おはようございます」、「お疲れ様でした」と挨拶をするようにしている。



そうこうしているうちに、企画展「古人骨」開会に向けての準備となった。以前、博物館の大先輩から「展示会というのは仲間と進められる部分と自分でやらなきゃいけない部分がある。」と教わった。それ以来、先輩や後輩、第三者にアドバイスをもらいながらも、担当者として責任を持つ部分、展示の根幹を担う部分については、とにかく時間を惜しまず勉強し、自分自身を徹底的に追い込んで、より良いものを作りあげられるよう努めている。それが、来館者に満足して帰ってもらうための学芸員の責務だと思うから。

そうした心持ちで、夜、一人収蔵庫で古人骨と向き合っていると、無性に人恋しいというか、寂しくなってくる。そうした時、目の前には個性あふれる古人骨達がいる…。

「島内99-2号さん、今日も丈夫な骨格ですね。」
 「下川東さん、下川東牧ノ原16号さん、ちょっと口腔内を見せていただきます。あれ？抜歯されました？」

「え？何ですか、貴船寺土壤127号さん。歯は大切？分かりました。自分歯医者に行きます。」「今日もご苦労様でした。明日もよろしくお願いします。灰塚さん。」

心の中のおしゃべりがとまらない。

はたから見たら黙々と作業しているだけなのだが、自分自身としては、おかげで寂しさもまぎれて、見識も深まる。

学芸員たるもの、展示の準備は自分との孤独の闘い。まさに「孤独の支度」なのである。

そうやって、古人骨との毎日の対話(?)によってかたちになったのが、企画展「古人骨」である。皆さんも是非、ご来館いただき、古人骨との対話を楽しんでいただきたい。

(沖野 誠)

